

座 長 所 見

米 田 巖*

Commentary and Rejoinder

Iwao MAIDA*

広島大学総合地誌研究資料センターは、これまで第一線で数多くの地域研究を積み重ねてきた気鋭の地理学者、ならびに、地域研究の分野において顕著な研究業績を世に問い、つね日頃より学会に対してに大きな問題提起をされてきた方々を招請し、シンポジウム形式で基調報告をいただいた。本報告は、基調報告および、その後、引き続き行われた質疑応答をふくむシンポジウムの論旨展開をふまえ、地誌学と地域研究の現状と課題を展望し、これを座長所見として取り纏めたものである。その際の準拠枠組は、さしあたり森川センター長よりあらかじめ示された主旨説明と次に掲げる4つの問題領域である。

- 1) 地誌学についての社会的要求はあるのか。あるとすれば、社会は地誌学に何を求めているのか。それに対して地誌学は今後どのように対応していくのか。
- 2) 地誌学はどのような視点から研究すべきか。どのような内容をもつべきか。
- 3) 地域はどう捉えられるべきか。
- 4) 地誌学と隣接科学との関係はどうあるべきか。

このようなメインフレームの設定の主眼は、オーガナイザーをはじめ、地誌／地域研究に携わるものが、研究対象地域や研究方法のいかに問わず、共通して直面する諸問題を、いま主として、地誌学の再生と賦活化と絡めて、新たな地平から展望しようとするところにある。

最初に、手塚氏は、伝統的に地誌学が重視されてきたフランスの事例をとりあげ、コレーム地理学の展開とその問題点を簡潔に提示し、フランスの地誌学研究の伝統を基本的に継承しつつも、ブリューネ学派とも称すべき独自のコレーム地誌の手法には一定の制約と限界があり、その世界解釈にもすくなからぬ問題点があることを指摘した。

* 広島大学総合科学部 ; Faculty of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

コレーン概念に基づいた構造モデル図は、地域の全体像を把握する上できわめて魅力的である。しかし、経済空間のみが全景におしだされ、自然環境、文化の担い手の関与がどのように加味されているのか、そして、類推、推論の過程が客観的に検証できるような形で一連の概念を操作できない憾みがある。また、方法論的にも、研究者の恣意的操作／解釈をどこまで排除できるか、地域の歴史的動態過程への配慮、文化的なものが分析フレームの中にどう繰り込まれているのか等、問題も少なくない。ヴィダル流の伝統的地理学／地誌学に慣れ親しんでいるものには、新奇なものへの誘惑と、それがゆえの反発の感を拭いさることはできない。フランス地誌研究伝統と革新の潮流をいま一度、原点に立ち返って再検討する必要があるだろう。

高谷氏の報告は、京都大学東南アジア研究センターでのながい研究生活史を現時点から回顧すると同時に、そこから、「私の地域研究の近未来」を展望するという形で展開された。方法論上の立脚点は、1つの地域を学際的かつ総合的に捉えるということ、地域の歴史的な変遷過程を重視すること、この2つの交差軸に地域をおいて考察することにつきる。1人で学際的／総合的か、多人数で学際的／総合的融合をはかるか—どの道を指向するかという悩ましい問題もあるが、その焦燥のジレンマから抜け出し、価値観を共有する人々の住む範囲を、「世界単位」として措定することにしたところから、独自の新しい世界の確定と、その結果得られる「世界」単位の解釈が開始される。もう一度論点を吟味しよう。

世界単位の定義：人々が生活して価値観／世界観を共有するような範囲、そこに帰属意識を持つような範囲（地理的範囲／地域とは言明・断定していない！）

世界単位の範囲の性質：長期にわたって安定的に存在する

世界単位の範囲の確定（画定）：主題図の重ね合せ法ではうまくいかない

世界単位の種別：生態適応型—ネットワーク型—大文明型／属地型・属人型

地域の捉え方に、地域の固有性を重視する派と、地域間の相互関連を動的に捉え、そこから地域の特性なり、変化を活写しようとするものがあることを認めたくて、世界単位を、生態を基層とする3つのダイナミックな累層的概念区分を着想するにいたる。

第四紀地質学者が、タイ研究班に属し、「水田の景観学的分類試案」、『熱帯デルタの農業発展—タイ・メナムデルタの研究』（1982、創文社）を経て、近著『世界単位から世界を見る』（1996、京都大学学術出版会）を刊行するに至るまでの間を足早に腑観するとき、著者の地域／世界へかけた見果てぬ思いが漂う。同書所収の大胆かつ説得的な仮説と、それにもとづく地域区分図は、このことを雄弁に物語る。

堀報告は、「地誌学的思考」という地理屋にはとてつもなく魅惑的かつ、それでいてこの言葉を前にすると、魔術でもかけられたように、押し黙り、それでいながら、皆わかった

ような気持ちにさせられる地理仲間だけのジャーゴンをキーワードに据え、そこから地誌学の可能性を展望するという魅力的かつ難解な問題領域から、「地誌」再生への道を提示する。

長い間、アフリカ研究や珊瑚礁研究に精力的に打ち込んできた堀氏は、地誌の認識座標を、地（空間）の体系、生活文化の担い手の血の体系、知（認識）の3体系にすえる。最終的には、これらの3つの体系は霊の体系に、いれ子状に取り込まれ、構造化されている。所論の骨子は、このようなミーニング・マトリックスこそが、ある場所／地域を、他の場所から截然と区別し際立たせている、と見るところにあるように思える。

地理学が長い間、タブーとして避けてきた、あるいは、より正確に実態に即していえば、軽視してきた精神的（宗教的）世界の地域／場所に対してもつ意味を、再びフィールドにおいて問い直すことの正統性を主張している。換言するならば、地域の実態なり特性が、いかに地－血－知の体系に準拠して記述され、説明が試みられたにせよ、それだけでは十分ではない。これらが霊の体系に包摂されてはじめて、場所なり、地域の「placefulness」の叙述（事実記載）が完結し、そこから説明が試みられるのである。

日本の地理学会が、人文地理学と自然地理学とに截然と別れていることを容認するか否かを別としても、あるいは、そのような状況が協業による分業であることを反映していると、強弁するか否かを別にしても、報告者は自然地理学の素養の上に、このような所説が空理空論ではないことを自ら実証的研究によって立証しようと試みてきたが、フロアからの発言にあったように、霊の体系の具体的な検証方法が明示されていない憾みがある。意味を記述し、翻訳し、伝えていく過程において、記述された地誌（記述される主体）－記述者の主体－読者の三位一体の関係がどのように、どのようなレベルで保証されるのか、すなわち、地誌の内容を記述する人－地域の主体が意味していること－読み手の三者の意味を介しての関係が明示的に分節化されていない。少なくとも、ここに提示された構造的モデル群では、素朴な概念モデルがラフな形で示されているだけであり、操作的概念として追試や検証に耐えうる水準にまで精密化する必要があるであろう。このことを座長所見として付言しておきたい。

熊谷報告は、第三世界の地域研究と地誌学－その課題と可能性と題して行われた。それは次の3つの論点に集約できる。地誌衰退の背景には地理学者自らの地誌に対する3つの誤解から生じているのではないか、という指摘である。すなわち、地誌記述が網羅的かつ総合的であるべきである、という第1の誤解、地理学者の著わした地誌こそ真の地誌であるという第2の誤解、そして、第3の誤解は、地理学者なら、その地域に通じなくても、地誌ぐらいは書けるという自信と思い込みである。

所説の第2の論点は、「地誌」の衰退に対して、なぜ「地域研究」がこれとは対照的に隆盛を極めてきたのかという問題提起をめぐっての議論である。その背景には、ナショナリズム／自国中心主義的な地誌編纂が国民国家によって主導され、内容も事実記載を第一義的としてこれを優先し、網羅的であることもってよしとする傾向があったこと、これに対して、地域研究は、異質な、あるいは理解不能な第二世界・第三世界の「他者」理解に主眼がおかれ、方法論的にも、地理学を含むより広域的な学際研究が重視されたことなど、記載の主体、研究対象などの点において、明白な変化が認められることを社会経済的・歴史的な文脈のなかで再検討した。

注目すべきは、地誌（学）主として本邦における第三世界の地理学的／地誌学的研究を歴史的・系譜的に鳥瞰したあと、第3の論点として提起した、自己の Papua New Guinea でのフィールド体験に即した地域研究／地誌学研究の目的と可能性についての展望である。報告者は、地域をなぜ描くのか、地域がなぜ存在するのかという原点に立ち返り、地域概念のゆらぎを根源的に捉え直し、そこからあらたに外部者の視点と同時に、地域の生活世界に生きる人々の視点をもふくめて、「地域」を再定義する必要性を指摘した。そこから、より広範囲の社会の人々や、次世代を担う若者たちに共感をともなう地域理解を浸透させていく可能性があるのではないか、という点に「地誌」再生の道を模索する。このような問題提起と論点整理のあと、OHPによるプレゼンテーションで提示された Papua New Guinea の地誌（地域）区分についてオリジナリティーや、そこでの新しい地誌試みに関してフロアーから質問も出されたが、他日を期したい。

中山氏の基調報告は地誌学と地域の在り方に関する日本的解釈の展開と題して行われたが、問題の基本的認識という点において、次のように、熊谷氏の所説と一部共通するところがある。すなわち、1) 日本で、地誌（学）というとき、学会にのみ通用する隠語にも似たこのタームは、地理学（者）の護符として通用し、それがあたかも当然の了解事項のごとく、金科玉条のように唱えられ、有難がられ、自らも敢えてその本義を問い直そうとせず、その正当性を有するものとされてきたように見えるが、それは秘儀的な幻想にすぎなかったのではないかと、そして、2) 地域研究の本家は地理学にありとするのは、単に手前勝手な思い込みではなかったか、という2つの素朴な疑問を提起するところから議論を開始する。そして標題の問題領域に接近するため、つぎのような2つの作業仮説を設定したうえで、地域／地誌／地理研究の相互関係と、それらの異同を学説史的に再検討し、地誌学の再定義の必要性を強調する。

- 1) 地誌学と地域研究はその目的と方法が異なる。
- 2) 地誌と地理のちがいを執筆者と読み手の認識からアプローチすることによって、両

概念の曖昧さを検証する

主要な著作、研究モノグラフに頻出する基本概念を丹念に比較考察した結果、本邦の地理学会においては、厳密な意味での概念規定とそのコンシステントな使用から、固有のターミノロジーの確立をみなかったことが指摘され、地理学と地誌学の内実と形式が曖昧模糊としたものとなり、一般的に理解しづらいものとなる遠因となったことをあきらかにした。

そのうえで、①地誌学の独自性を主張するのは、日本固有の伝統であり、無用の混乱を避け、地理が社会的に広く受け入れられるためには、②地誌を再定義して、独自の位置づけを与えるか、地理に統一して、地域研究との目的と方法論上の違いを鮮明にしたほうがよいとする独自の主張を論拠づける。

これにたいして賛否両論あろうが、診断が同じでも、処方異なる場合もある。今後の地誌学研究をみすえる意味でも、傾聴すべき論点の1つであることは明白であろう。

最後に、日本古代中世史に、地域的観点を導入しつつ、広義での日本地域研究を精力的におし進めてきた佐竹氏の基調報告は、地誌編纂と民衆の歴史意識の推移を、広島周辺地域を対象として展望した。

本報告の核心は、地域の歴史と、そこにすむ人々が歴史の心性を、言い換えるならば、ここでいうところの歴史意識をどのようにかたちづくってきたかを、地誌書から読み取る作業の中から、歴史の舞台に地域の担い手としてたち現われる彼等独自のイデオシンクラシーの推移を、時代的に重層させて透視しようとするところにある。

このような意欲的な試みは、地域史を大胆に1) 伝説の時代、2) 伝説から歴史への目覚め時代、3) 近世から近代への黎明期に区分し、それぞれの時代にしか見られない民衆の歴史意識と、どの時代にも共通して見られる歴史意識を、倉橋島を中心とした、『芸藩通志』の対象領域の枠内で重ね合せながら、島民、藩民、臣民、県民、国民それぞれのレベルでの歴史感覚の生成過程を通時的に検証しようとしている。

それらの分水嶺は、一時代を画する政治・社会経済システムの変化もさることながら、その推移を決定的に招来した動因は、各レベルでの地域内／地域間の経済的發展と、それに基づく文化交流の緊密化であろう。佐竹氏の発見は、1つの地域に住む人々の島、藩(県)、国、ある特定の圏域に対する時間的／空間的アイデンティティーを求めてやまない熱き思いへの共感であった。

地理の分野では単なる地誌的記載事項を地図化するための物産一覧を中心とした地域統計として利用するのがせいぜいのところで、歴史意識の検出のための史料・素材として活用しようとする問題意識は持ち合わせていない。地誌学の隣接分野から、その研究方法、問題意識など学ぶものがあるように思われる。示唆するものは決して少なくない。

6人のパネリストによる基調報告は、主催者側のシンポジウムの主旨、および森川氏の地誌学の再生と賦活化へ向けての問題提起とおおむね重なりあったように思われる。しかし、時間の制約もあり、フロアーの、および、基調報告者相互の対話の深化を充分はかれなかったのは、座長の責任であることはもとより明白であるが、ここで、クロス・シャッセの議論のなかで本質的に重要と思われる論点でありながら、時間の制約等により充分議論を深化させることができなかったポイントを整理・集約して以下に掲げ、その責めの何がしかでもふさぎたい。

- 1) 地理学者が他の分野と共同しつつ、地理学というデシプリンを通じて独自の貢献をなし得るとすれば、それはどのような方法、認識を通じてであろうか
- 2) 地誌学あるいは地域研究において自然地理学者の役割は何か。自然は単に人間活動のバックグラウンドとしてしか語られないことが多い。自然地理学者にも責任の一端はあるが、このことが地誌の衰退とつながっているように思われる
- 3) 地誌の記述には目的があると考えられるが、その目的はどのように捉えたらよいか
- 4) 地誌とイデオロギーはどのように関連させて取り扱うのが適当か
- 5) 小・中・高校の教育者は、地誌をどのように捕えているのか話題提供者として出席してほしかった。また旅行業者や、地誌への社会的ニーズを知るうえでも、旅行業者や行政サイドのコメントがほしかった
- 6) 地誌研究資料センターの主催シンポジウムであるにもかかわらず、主旨説明、基調報告、ディスカッション、そのいずれのところでも広島大学総合地誌研究資料センターの調査・研究活動への言及がなく、それらに対する総括と評価がなされていない。今後の地誌研究活動との関連において、内外の既往の地誌学研究とその成果を適切に総括し、その中に、今回のシンポジウムを位置づけるべきではなかったのか

以上の諸点からも明らかなように、フロアーからも内容や会議の進め方に関する要望などが提起されたが、これに対応できず、今後課題を残した。コンヴィーナーの1人として責任を感じる。

科学者はひたすら専門の仲間のために論文を書いてきた。専門化が進めば進むほど、それを読んでくれる専門の仲間の数も少なくなる。地誌(地理)学もその例外ではない。ターミノロジーさえ異なるとなれば、なにおか、言わんやである。しかし、いまや、専門の仲間以外の一般読者にもアピールするだけの内容をそなえ、しかも、理解できるような形でわれわれの成果を説明しなくてはならない段階に来ている。いわゆる地理学者の社会に対するアカウンタビリティの問題がそれである。ポピュラーサイエンスであるはずの地理

学が『サイエンス・マスターズ』シリーズの一角を占めるようになるには、それなりの覚悟と自己変革のための努力が求められよう。それは科学の通俗化とは異なる。

地理教育の場にだけ地誌をとじこめ、ジャーナリストや、他のマスメディアに全て委ねていいはずもない。変貌してやまない地球環境の実像が今日ほど求められているときにはないであろう。それを正確にしかも迅速に、社会や学校教育へ継続的に還元していくプロフェッショナルの一人は地理学者である、ということには、これよみよがしの事挙げとは違い、すくなくとも嘘はない。控えめに見ても、今が失地回復の絶好のチャンスなのである。

今や、地理学以外の人々が異口同音に環境、空間、地域といいはじめている。書評子が鎌田東二『聖なる場所の記憶』（1996、講談社）を取り上げて、気鋭の宗教学者が初めて構想した日本の精神地理学と奉る時代である。しかし、われわれ地理学会にも自前の誇りに足る地誌書を持つに至ったこと大いに喧伝しても、ここでひいきの引き倒おしということにはならないであろう。その数少ない例として、『ドイツ—転機に立つ多極分散型国家』（1995、大明堂）をあげておきたい。伝統的なドイツ地誌の筆法を基本的に継承しながらも、シュラー（Schöller, P.）流の問題指向的地誌の流れを汲む立論構成は、これからの地誌研究の方向のあるべき1つの道筋をさし示してきわめて興味深い。また地域研究の分野でも『現代の地域研究講座』全4巻（1993～1994、弘文堂）の刊行後、『世界単位から世界を見る』（1996、京都大学学術出版会）が出版された。本邦の地域研究が、この四半世紀の間にどのような研究成果をあげたかを如実に指し示す1つの道標である。これまでの地理学の伝統的な分析枠組や分析具に必ずしも拘泥せず、独自の観点から地域研究の新しい地平線を切り開いたといってもよい。たった1人での反乱と、たった1人での総合—われわれは、ここに数こそ少ないけれども、素晴らしいモノグラフを学界共通の知的資産リストに付け加えることをうれしく思う。

研究史のなかで、このような逸すべからざる労作が刊行される時期と相前後して、折しも、このような形でシンポジウムが開催され、各位のご協力を得て、おおむね成功裡におえることが出来たことは、単なる偶然の一致ではあるまい。今後に向けて大いに地誌学／地域研究／地理学発展にさらに邁進するための絶好のチャンスであり、そのための一里塚として胸に銘すべきであろう。

これを契機に、これまで積み重ねてきた内外の学会の共通財産ともいうべき既往の研究の目録をつぶさに公平な立場から、自他ともに客観的に再評価していくことが必要であろう。先陣を競い、功名をたてるは、武門の習いと聞くが、忘れてはならぬことは基本であり、伝統にならい、これをたえず革新していくことである。アングロサクソンと大陸ヨーロッパの地誌学派の古き良き伝統は、われわれがそこから何を学ばなければならないかを

端的に示す。そして本邦にも、目立たないけれど、手堅い地誌学派の細き流れ、その何れにおいて静かではあるが、しかし着実な自己革新の波がひしひしと感じられる。地誌学／地域研究に限らず、基本と理念といものは、何かを雛型として育てはぐくまれてきたものについての謂いなのであろう。伝統をたえず革新し、しかも、その原点にある基本と理念をとい直すことから始める時がいまそこに来ている。